

鹿児島方言の「動詞連用形＋オル」

久保 蘭, 愛

<https://doi.org/10.15017/1398461>

出版情報 : 語文研究. 114, pp.1-20, 2012-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

鹿児島方言の「動詞連用形+オル」

久保 蘭 愛

1. はじめに

西部日本方言^(注1)の動作の時間的展開の表現において、「動詞連用形+テ+オル」(以下「テオル」と表記する)と「動詞連用形+オル」(以下「～オル」と表記する)の対立はよく知られている。現代方言に関してはそれらの形式の記述がすすみ、意味的な対立が明らかになりつつある。また、中央語史においても、動作の時間的展開を表す形式(つ・ぬ・たり・り等)に関する多くの研究の蓄積が存する。

一方、方言史における動作の時間的展開を表す形式についての研究は、そもそも方言を反映する文献資料が非常に乏しいことから困難を極める。特に、西部日本方言は上記のように中央語及び現代共通語とは異なる体系を持っており、どのようにしてその体系が形成されたのか、現代以前ではそれぞれの形式がどのように用いられてきたのかなど、興味深いところであるのだが、今のところほとんど明らかになっていないといつてよい。

18世紀鹿児島方言を反映すると言われるロシア資料には、「～オル」という形式が存する。本稿では、ロシア資料他、少ないながらも残る方言文献を用いて「～オル」の歴史的記述を行う。これが一つめの目的である。

ところで、現代鹿児島方言を見ると、この「～オル」系統の形式が概ね共通して持つ意味と同じ意味を担う「～ゴッ」という形式が存する。次のような例である。

(1) a アメガ ファイゴッド ((今) 雨が降っているよ)

b ヨカフニ イワレゴッタ (良い風に言われていた)

他地域の「～オル」系統の形式は、さまざまな語形のバリエーションが見られるものの、多くが存在動詞「オル」に出自を求めることができる形式となっている。しかし、この「～ゴッ」は一見すると形態的に「オル」との類似が見られない。この形式の出自を明らかにすることが二つめの目的である。現代方言における「～ゴッ」の振る舞いや音声学的な見地から、その出自について考察する。

2. 近世期における鹿児島方言の「動詞連用形+オル」

2.1. ロシア資料とは

本稿で扱うロシア資料とは、1728年にロシアへ漂着した鹿児島少年ゴンザと、科学アカデミーのアンドレイ・ボグダーノフによって作成された、ロシア語と日本語の対訳資料（辞書、文法書、会話集等）である。鹿児島方言が反映された日本語訳部分も含め、ほぼ全てキリル文字で表記されている。当時の音声やアクセントを知る上で重要な資料であり、これについては、村山（1965）、江口（2006）等に詳しい記述がある。

本稿で用いる資料は、この資料群のうち、『世界図絵』『友好会話手本集（草稿本）』『日本語会話入門』の3点である。^(注2)これらは、単語を集めた辞書・語彙集の類ではなく、ロシア語の文に対して日本語訳を行っているものである。したがって、日本語訳だけでなく、ロシア語文からも当該形式の意味を明らかにすることが可能である。

以下、ロシア資料から例を挙げる際は、ロシア語文、（ ）内にその現代日本語訳、ゴンザ訳、（ ）内にゴンザ訳を解釈し漢字仮名交じり文にしたもの、の順に挙げる。^(注3)問題となる箇所には下線を引いた。また、出典は、『世界図絵』=【世界】、『友好会話手本集（草稿本）』=【友好】、『日本語会話入門』=【日本語】、のように示し、それぞれ例の存する章、『日本語会話入門』については影印に記載の用例番号を挙げる。

2.2. ロシア資料にみえる「動詞連用形+オル」の意味

ここでは、ロシア資料に見える「～オル」の意味を明らかにするために、ロシア語文と日本語訳の両方から考察を行う。次の例を見られたい。

(2) a ロシア語：Александръ ведикій всегда увещавался мужеством войновъ своихъ, которые повелѣнїю его послушны были。（訳：アレクサンドル大帝は君主に従順である自分の兵士に常に勇気を説いた。）

ゴンザ訳：Втока Алеханда фяттъ ицкеворатта цыюкакоте вага иксанинво доношь анофтон ицкБяркоте кичь оратта（太か アレクサンダはふやっと 言いつけおらった 強かことに 我が 戦人を どの衆あの子の 言いつけやることに 聞いて 居らった）【友好 14章】

b ロシア語：прихожу（訳：来る）

ゴンザ訳：киворь（来おる）【世界 序章】

c ロシア語：онъ далеко живеть и скоряе нелзя было поспѣть ѿ дѣльвалъ

другое платье (訳：彼(仕立て屋)は遠くに住んでいる。別の衣装を仕上げつつあったために、早く行くことはできなかった。)

ゴンザ訳：анофта тову орань фаю йкя нарань, цкуйтойворанга мафтоцно йшо, (あの人は 遠う 居らる 早う 行きは ならん 作りとりおらんとは もうひとつの 衣装)【日本語 299】

(2a)の「～オル」と薩隅方言訳されているロシア語動詞 увешавался は、行為そのものや動作の進行、反復を表しうる不完了体動詞と見られる。всегда (いつも) という副詞があり、動詞が過去形であることから、この一文は過去の反復習慣を表していると考えられる。(2b)は『世界図絵』の単語部分に対する訳であり、前後の文脈が存在しない。ロシア語単語は不完了体動詞であるため、進行を表すとも考えられるが、ゴンザがどういう意図で「～オル」と訳したのかは不明である。(2c)のロシア語文は、「～オル」に対応する動詞が進行を表す不完了体動詞であると見られ、ロシア語文全体として「作っているところだったため」という動作の進行を表している。一方、日本語訳部分を見ると若干の誤りがある。不可能を表す副詞 нельзя がかかるのは、「行く」という部分までであり、ロシア語文の文意としては「行くことができなかった」となるはずである。「仕上げる」ことが不可能だった訳ではないのだが、ゴンザは「作りとりおらん」と否定形で訳をしてしまっている。日本語訳を解釈するとすれば、「作り終わっていないのは」といったところであろうか。^(註5)(2c)の「～オル」が進行態を表しているともとれないことはないが、少なくとも「～オル」に対応するロシア語文は動作の進行を表しているとは言えよう。

今回の考察の対象とした資料に「～オル」は3例しか見られないが、上記の例を見ると、少なくとも過去の習慣の意味を確実に持っており、また、やや不審ながらも進行態の意味をも持っていた可能性が考えられる。ここに見られる「～オル」は、現代鹿児島方言の「～オル」と意味的に重なる部分があると言える。

2.3. ロシア資料前後の鹿児島方言の「～オル」

次に、ロシア資料前後の鹿児島方言資料として、『大和口上物語集』を見てみよう。この資料は、奥里(1938)によると、薩摩藩あるいは首里王府の役人の手になるもので、琉球に伝わる短篇伝説2編を収録したものである。奥付などは存せず、その書体から元禄頃に成立したと推定される。九州方言学会編(1991)では、その言葉は、元禄前後の京阪語を主体として鹿児島方言が混入し

ていると述べる。資料原本は戦火で失われているため、奥里（1938）の翻刻を利用した。

- (3) a ある時、奥間殿、田を耕して戻りに、その井川へ手足洗に罷り、ちよ
と岡の上より見ましたや。うつくしい女郎がひとり、折角髪を洗をつ
たさうな。
b 其女上いかにしかりつらう、羽衣のあり所を知り、弟を手なふであ
そびをる時、「…」といふを、…
c それから、(中略)雷が鳴さうなといふ時は、となりとふたり、桑の木
の本に家を作りたところが御座りたよつて、其處へ背負うていきをつ
たといひます。

『大和口上物語集』には短篇ながら「～オル」が8例見られる。(3a)は、話の主人公である「奥間殿」が見ると、女が髪を洗っていたという箇所であり、これは「洗う」動作の進行である解釈できる。(3b)も「手なふで（一緒に）遊ぶ」という動作を行っている間に、別の動作が行われると解釈できるため、「あそびをる」は進行態を表すと見られる。一方、(3c)は「雷が鳴るときは（いつも）そこへ背負って行った」という過去の習慣を表している。

このように、『大和口上物語集』の「～オル」には、動作の進行と反復習慣の意味が観察される。ただし、先に挙げた九州方言学会編（1991）が述べるように、この資料には京阪地方の言葉も混在しているため、「～オル」が純粋に鹿児島方言であると即断はできない。しかし、ここに見られる「～オル」に、現代京阪地方のような卑語性はなく、アスペクト的な意味を失っている訳でもない。また、近世期の中央語においては、「オル」が「マス」を伴って丁寧語表現として発達していたようであるが（金水2006；216-222）、そういった「～おります」という形でもない。つまり、この「～オル」は、動作の時間的展開を表す、待遇的にもニュートラルな形式として用いられているのである。したがって、本資料の「～オル」は、現代西部日本方言のアスペクト形式とつながりのあるものであると考えられる。^(注8)

次に、幕末の言語資料として西郷隆盛の義妹岩山トク氏の談話資料を取り上げる。中村（2004）によると、岩山トク氏は、安政3年（1856）生まれの生え抜きの薩摩語話者であるという。録音日時は昭和27年（1952年）6月21日であるが、「トク氏の言語形成期は江戸時代末期である」として、19世紀の鹿児島方言資料とされている（以下、「岩山資料」と称する）。

以下に例を挙げ、一つずつ見ていこう。

- (4) a ソノ ナオヨン チ スモトイノ マイジツ キヨイヤシタ。
 (共通語訳：その「ナオヨン」という相撲取りが毎日いらっしゃって
ました。)
- b ヤドン ナメガワン ウエー、 ジーサン ニタ オジーサン オ
 ジャシタ。ソノッサア トマリオッセエ ナ、ソノッサア アタリヤ
 『サイゴーサン ジャッ』チッセエ。ワロツ オサイジャシタ、ジブン
 デ。
 (共通語訳：私のうちの滑川の上に、じいさん、(西郷さんに) 似たお
 じいさんがおられた。その人が(温泉に) 泊まっていますね、その人あ
 たりを『西郷さんだ』と(温泉に来た人たちが) 言うので、(西郷さん
 は) 笑っていらっしゃった、自分で。)
- c アネジョタチャ アッバイ センタク シタイ ナイ シタイ、シヨ
 イヤシタ。ソスト ナ、ヨソノ シト ナ、ミケ オジャス ト。
 (共通語訳：姉さんたちはやっぱり洗濯をしたり何したり、しておら
 れました。そうするとね、余所の人とね、(西郷さんは) 見にいらっ
 しゃるの。)

「岩山資料」では、「～オル」系統の形式が「～ヨル」に近い音で現れる。この「～ヨル」についてみていくと、(4a)は、トク氏が「毎日」と発話している通り、「来る」という動作の過去における反復、つまり過去の習慣を表している。(4b)は、「泊まっている」老人を他の人々が「西郷さんだ」と言う、という場面であることから、進行態と考えて良いであろう。(4c)は、女性達が家事をしているところを西郷が見に来るという箇所であり、「シヨイヤシタ」の部分
 は動作の進行を表していると考えられる。

『大和口上物語集』の例は慎重を要する点もあるが、岩山資料に見られるように、江戸時代末においても現代に直接つながる用法を持つ「～オル」系統の形式が用いられていることがわかる。

2. 4. 近世期鹿児島方言の「～オル」のまとめ

ここまで見てきたように、近世期の方言文献に見られる「～オル」(「～ヨル」を含む)は現代の西部日本方言のアスペクト形式に見られるような進行態や過去の習慣の意味を持っていた。

『大和口上物語集』及び「岩山資料」の「～オル」には進行態の意味が問題なく認められるが、ロシア資料に関してはやや不審なところもあった。しかしな

3. 「動詞連用形+ゴッ」の出自

3. 1. 問題の所在

ところで、現代鹿児島方言には「動詞連用形+オル」と同様の働きを持つ「～ゴッ」という形式が存する。次のような例である。

(6) a アメガ フイゴッド ((今)雨が降^(註11)っているよ)

b ヨカフニ イワレゴッタ (良い風に言われていた) (再掲)

(6a)は進行態、(6b)は過去の習慣の例であり、いずれも西部日本方言の「～オル」系統の形式が共通して持つ意味を表している。

日本語のアスペクト形式、特に中心的な役割を果たす有標のアスペクト形式は、各地で用いられる存在動詞を素材として形成されることが知られている。工藤(2004)の記述を挙げておく。

(7) (1) 存在動詞「アル」「オル」「イル／イダ」のどれを、有標の中核的なアスペクト形式の語彙的資源とするか。中核的なアスペクト形式とは、最も動詞のタイプの制限のないものであるとすれば、〈人(有情物)の存在〉を表す本動詞との対応が認められる。

(2) 「シテ形式+存在動詞」という構文的組立形式のみを採用するか、「連用形+存在動詞」をもアスペクト形式化するか。「連用形+存在動詞」のみがアスペクト形式化されることはない。

人の存在	アスペクト形式	
アル	開けてあろわ(八丈方言)	開けやる／開けたーる(和歌山県田辺、新宮、御坊方言等)
オル	開けると(三重県津、島根県平田方言等)	開けよる／開けると(北限は岐阜県高山方言、南限は種子島方言)
イル イダ	開けてる(標準語、長野県松本方言、ウチナーヤマトゥグチなど) 開げでだ・開げでら(五戸、五所川原、鶴岡、南陽方言等)	(長野県開田方言)

(工藤(2004:42))

西部日本方言の進行態を担う形式は、(5)にも示したようにさまざまな語形のバリエーションが存するが、いずれも存在動詞「オル」にその源流を求めることができるものばかりである。では、鹿児島方言の「ゴッ」はどこからきたのであろうか。以下ではその出自について考察していく。

3. 2. 先行研究

3. 2. 1. 「～オル」の変化説

「～ゴッ」の出自について触れている先行研究を概観してみよう。まず、「～^(註12)オル」の変化したものとする論を見してみる（下線は筆者による。傍点はママ）。

(8) 進行と既然 進行態には普通オルを動詞の連用形につけて表す。先行の連用形の母音とオルのオとの母音が重複するので、避けてこれをゴルと発音することも多い。一部にヨル（これも母音重複を避けた結果であるが）と言う。（上村（1968：206））

(9) サ変動詞のばあいには、ふつう「セオイ」「セオッタ」のように非熟合音声であるが、ときに、

○センソモ シゴッタタイ ガー

戦争もしおったのだからなあ。

のように、カ行動詞への類推で「シゴッタ」となることもある。

（瀬戸口（1987：120-121））

上に挙げた上村（1968）は母音重複忌避のために、瀬戸口（1987）は「カ行動詞への類推」によって「～ゴッ」が生じたとする。いずれにしても「～オル」からの変化であるという指摘である。また、後藤（1994）は、その変化過程については述べてはいないものの、「～ゴッ」の源流は「～オル」であるとする。

(10) 「ゴッ」は助動詞的用法を r 変化動詞「オッ（居る）」を祖とするらしい。老年層は継続・進行をあらわすのに「オッ」を用いて「ゴッ」は使用しないようである。（後藤（1994：89））

上村（1968）は、子音の挿入を想定することで「～ゴッ」の成立を説明しているものであるが、鹿児島方言では母音の融合が頻繁に起こり、また母音に限らず形態素同士の融合も起こっている。

(11) a 蠅 [he] (<[hae])

b 貝 [ke] (<[kai])

c 書いてあった [kaitjatta] (<[kaite atta])

d すればよかったのに [sureja jokattate:] (<[sureba jokatta to ni])

こういった場合、特に子音を挿入しているようには見えない。また仮に母音連続忌避のための子音挿入があったとしても、それがなぜ [g] であるかという説明が必要であろう。また、「カ行動詞への類推」によって、「～ゴッ」が生じたという瀬戸口（1987）の説明も、カ行動詞は少なくともはないものの、全ての動詞に影響を及ぼせるものなのか、少々疑問が残る。

3.2.2. 「ゴト」説

一方、全く別語から生じたという説も見られる。津田（2010）は、「～ゴツ」の出自を「如し」である考え、次のように述べる（下線は筆者による）。

- (12) 元々様態を表す形式の「ごと ある（ようだの意）」から実際にまだ動作の進行過程に至っていない（が直前である）将然で使用されるようになり、そこから、「ごと」単独でも将然を表すようになったと捉えられる。そして、「しそうだ」の時間的隣接場面であり、将然の後に起こる実際に「している」場面をも想定・含意して、現在のように進行過程でも使用が可能になったと考えられる。ただし、2009年調査からは将然での使用はほぼみられないが、これは一般的なアスペクトの将然用法の場合と同様に、特定の動作を行うことが予測できる動詞でないと使用しづらいためであろう。（津田（2010；74））

この論は「～ゴツ」が「如し」から生じたとしているが、「～ゴツ」と「～ゴト（あるいは「ゴチャー」<「ゴト+アル」）」とを比較してみると、その振る舞いに大きな違いが見られる。

まず一つめの違いは「ゴト（ゴチャー）」と「～ゴツ」の接続する動詞の形である。

- (13) a アメガ フイゴッド（進行：雨が降っているよ）
b アメガ フッゴチャ（様態：雨が降りそうだ）
(14) a ハレゴッタ（反復：あの頃はよく）晴れていた）
b ハルッゴチャンナア（様態：晴れそうだねえ）

(13a) (14a) はアスペクト形式「～ゴツ」の例であり、(13b) (14b) は、様態を表す「～ゴト（ゴチャー）」の例である。動詞に接続する場合、^(注13)「～ゴツ」は基本的に連用形に相当する形に接続する。一方「～ゴト」が様態を表す場合は終止連体形相当に接続し、^(注14)希望を表す場合は意志形に接続する。このように「～ゴツ」と「～ゴト」とでは接続する活用が異なっている。

二つめは助動詞の承接順である。次の例を見られたい。

- (15) イカンゴツナッタ（行かないようになった）
オランゴンナッタ（いなくなった（いないようになった））

上の例のように、様態を表す「ゴト（ゴチャー）」は否定のあとに現れうる。しかし、アスペクトを担う「～ゴツ」は否定のあとには現れない。

- (16) *イカンゴッタ（行っていなかった）
*オランゴッタ（いなかった（いていなかった））

一般に、日本語の文法カテゴリはおおよそ次のような順序で現れる。

(17) [[[[[命題] ヴォイス] アスペクト] 肯否] テンス] モダリティ]

鹿児島方言もこの構造に当てはまるとすれば、「～ゴッ」と「～ゴト」とは異なる文法カテゴリに属するものであると考えられる。

このように「～ゴッ」と「～ゴト」は、現代鹿児島方言において接続する動詞の形態や承接順といった文法的特徴が異なる。

もっとも、現代方言における「～ゴッ」と「～ゴト」の振る舞いの違いは、歴史的な変化の過程において接続先の動詞の形態や承接順が徐々に異なっていたものであり、本来は同じ振る舞いをしていたのではないかという反論もあろう。しかし、モダリティに属する形式がアスペクトを表す中核的な形式になるという変化が一般に起こりうるかどうか少々疑問も存する。また、意味の発展経路に照らしても両者を同一出自とみなすことに疑問が残る。(5)に挙げた工藤(2004)を見ると、将然は進行の意味から発生するというものであった。これらの諸点を考慮すると、「～ゴト」が将然の意味から進行の意味を獲得したと考えるよりも、やはり「～ゴッ」と「～ゴト」とは出自を異にするものと考えの方が良いように思われる。

では、「～ゴッ」の出自は一体どこに求められるのであろうか。ここで「～オル」と「～ゴッ」とが一個人の中で両形の使用が可能であることに注目したい。

(18) a ヨカフニ イワレゴッタ (反復：良い風に言われていた) (再掲)

b セツチャンチ イワレオッタ (反復：せつちゃんと言われていた)

c バーチャンワナ セツコドンチ イヨッタノ

(反復：おばあちゃんはね、セツコ殿と言っていたの)

(19) a アメガ ファイゴッタ (反復：(あの頃はよく)雨が降っていた)

b アメガ ファイゴッド (進行：(今)雨が降っているよ) (再掲)

c アメガ ファイオッタ (反復：(あの頃はよく)雨が降っていた)

上の2名のインフォーマントからは、「～オル」「～ゴッ」に加え、「～ヨッ (<ヨル)」の例も得ることができた。インフォーマントの内省によれば、これら3形式の間に意味の違いはなく、どちらを用いても良いという。

また、「～ゴッ」は「～オル」と同じラ行五段に活用する。以下に後藤(1994)の活用表を改編したもの及び抜粋した例文を載せる。

	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
語幹 go-	ra, ro	i, Q	Q	Q	re	re

- (20) a ナッゴランカッタネ (泣いていなかったねえ)
 b オカーサンガ モドッキヤットツズイ ベンキョオ シゴロ (お母さんが帰っていらっしやる時まで勉強をしよう)
 c オカーサンナ シゴツ シゴイヤレバ ヨカト アタイガ オチャオイルツデ (お母さんは仕事をしていらっしやれば良いのよ。私がお茶を入れるから)
 d モ アヒコアタヤ イネオ カイゴッタ (もう彼処あたりは稲を刈っていた)
 e キシャガ キゴツド (汽車が来るぞ)
 f キシャガ キゴツカ テオ アゲックレ (汽車が来つつある時は手を挙げてくれ)
 g ソゲン アソンゴレバ インマ ガラルットヨ (そんなに遊んでいれば、今、叱られるのだよ)
 h ワヤ ココンイネオ カイゴレ (君は此処の稲を刈っておれ)

(後藤 (1994 ; 87-89))

先に述べたように、形の上からは「～オル」を素材としているようには見えない。しかし「～オル」と「～ゴッ」に意味的な違いがないことに加え、上のように「～オル」と同じラ行五段に活用することからも、「～ゴッ」は「～オル」の変化したもの、つまり「～ゴッ」(さらに「～ヨッ」も含めて)は、形態のバリエーションである^(註15)と考える。

3.3. 変化の要因 — 語中のオの音価 —

では、この「～ゴッ」はどのようにして変化したのだろうか。そもそも変化しうるものなのだろうか。ここで、ロシア資料に見られる「～オル」の表記について注目したい。(2)に挙げた例のゴンザ訳の該当箇所だけを抜き出してみよう。

- (21) a ицкеворатта 言いつけおらった【友好 14章】
 b киворь 来おる【世界 序章】
 c цкуйтойворанга 作りとりおらんとは【日本語 299】

上の例のように、「～オル」の「オ」は3例とも во と表記されている。一方、単独の存在動詞「オル」はすべて о と表記される。

- (22) a орь おる【友好 5章】
 b орь おる【世界 25章】

迫野 (1991) は、ロシア資料の一つである『新スラヴ・日本語辞典』の「オ」の表記が、語頭では o、語中では vo であることについて、次のように述べている。

- (23) 『新スラヴ・日本語辞典』のオの表記は、当時の薩摩の方言と関係あるものと思われる。おそらく当時の薩摩方言では、語頭では [o] 語中では [wo] と発音される音声的な傾向があり、注意深い観察者がそれを忠実に写し取ったのではないかと思われる。ロシア語には [w] の音がないので薩摩方言の語中の [wo] の音を、唇を合わせるという点から近似的に「в」の文字で写し取ったものと思われる。日本語の「ワ」「ウエ」の音も「в」で表されているのである。

迫野 (1991) はロシア人による筆録であるという立場に立ち、現代における各地の方言のオの音声の様相を考慮した上で、18世紀前半の鹿児島方言の音価を語頭では [o]、語中では [wo] ^(注16) であったとしている。

この語頭 [o]、語中 [wo] という相補分布が、今回の対象資料である3点についてもまったく同じように現れる。

(24) 語頭

- a ロシア語文：Научиль изрядно. (見事に教えた)
ゴンザ訳：Ю осоеятта (良う 教えやった) 【友好 15章】
- b ロシア語文：поль (女の子)
ゴンザ訳：онаго (おなご (女子)) 【世界 36章】

(25) 語中

- a ロシア語文：Тербую клятвы. (宣誓を必要とする)
ゴンザ訳：Нозомъ огамкотво. (望む 拜むことを) 【友好 15章】
- b ロシア語文：сърныи (硫黄)
ゴンザ訳：ивоннь (いを (硫黄) んと) 【世界 4章】
- c ロシア語文：шесть (竿)
ゴンザ訳：саво (さを (竿)) 【世界 51章】

また、次のように、語中であっても o で表記されるものは、複合名詞等の後部要素の語頭などに限られる点も同様である。

- (26) ロシア語文：сѣдои (白髪)
ゴンザ訳：штагаое (白髪生え) 【世界 36章】

これらの例を見て分かるように、ほぼ例外なく形態素の頭は o であり、それ以外は vo であることがわかる。迫野 (1991) の論に従い、18世紀前半の鹿児島方言の語中オは [wo] という音であったと考える。

[wo] は、かつての中央語においてもその存在の可能性が指摘されており、また現代の各方言にも存在が認められる。本稿の対象である現代鹿児島方言に関して、木部 (1997) は次のように述べている (下線は筆者による)。

(27) a 「ア、イ、ウ、オ」の音は共通語と同じ。「エ」は全域「イェ」である。ただし語中では「ウエ (上)」「マエ (前)」のように「エ」となることが多い。種子島では「ウォ」と言う。また「シウォ (塩)」「イウォ (魚)」のように語中の「オ」だけを「ウォ」と言うのは周辺地域に多い。(木部 (1997: 5))

b 「エ」は語頭で「イェ」、語中で「エ」である。「オ」は直前の母音が「イ」のときだけ「ウォ」である。(木部 (1997: 26))

(27a) は鹿児島方言全体について、(27b) は穎娃町方言についての記述である。18世紀前半から現代にかけて、徐々に失いつつあるが地域によっては未だ語中の [wo] の音が保存されているということである。

この語中のオ [wo]、つまり現代日本語のワ行子音に相当するような両唇を用いた音が、「～ゴッ」への変化の要因となったのではないと思われる。

[w] と [g] (または [ɣ] [ŋ]) の交替は、音韻変化と言えるものではないが、各地の方言にいくらか例が見られるものである。例えば琉球方言では次のような例が見られる。

(28) 久高島

ワ行子音が、[gun] (居る)・[gu:] (緒) のように、[g] になる特殊対応をする。この [g] は閉鎖が極めて弱い。(生塩 (1984: 231))

(29) 喜界島南部の荒木、中里方言に見られる語頭の ?u および阿伝方言にみられる gu が喜界島北部の坂嶺方言および塩道方言の wu に対応する場合がある。対応関係を解り易くあげると次の通りである。

	坂嶺方言	荒木・中里方言	阿伝方言
女	wunaŋu [wunaŋu]	[?unaŋu]	[gunaũ]
夫	wut'u [wut'u]	[?ut'u]	[gut'u]

これらの方言例を踏まえて変化の歴史を考えると、これらは

w $\left\{ \begin{array}{l} ?u \text{ 荒木方言、中里方言} \\ gu \text{ 阿伝方言} \end{array} \right.$

の変化をたどったものと考えられる。(輝 (1984: 431-432))

(30) 奥方言 [gwata] (腹)、[gwahamunsa:] (若者たち)、[gwahain] (わか
る)、[gwaçi:n] (分ける)、[gware:n] (笑う)、[gwatʃi] (脇)

辺野喜方言 [gwata] (腹)、[gwan] (私)、[gwahasana:jɪ] (若者)、
[gwaki] (脇)、[gwarabi] (子供)、[gware:n] (笑う)、[gwaki:n]
(分ける)

宇嘉方言 [gwata] (腹)、[gwe:ku] (權)

辺野喜方言ではワ音はほとんど [gwa] になる。

さらに次の方言ではワ行子音は [g] となる (中本1976、法政大学沖
縄文化研究所1985)。

沖縄南部久高島 [gi:n] (坐る)、[gui:n] (酔う)、[gun] (居る)

喜界島花良治 [gutu] (夫)、[gurirun] (折れる) (内間 (2004:39))

上記の諸例は、ワ行音に対応する音が、[g] (あるいは [gw]) になっているものである。体系的な音韻変化ではなく、生塩 (1983) で言及されているように、琉球方言において個別的な変化であるようだ。^(注18) 琉球方言の [w] から [g]、[gw] への変化は、中本 (2011) によれば、狭母音化によって子音の緊張が高まり、破裂音化したものと捉えられている。鹿児島方言とは変化の要因が異なる可能性があるものの、日本語において [w] から [g] への変化が起こりうるものであることがわかる。

さらに、本土方言を見ると、数は少ないながらも次のような [w] に対応する [g] (または [ɣ] [ŋ]) の例が見られる。

(31) 大分県

輪 [ga] わいら (私たち) [gaira]^(注19) (『日本方言大辞典』小学館)

また、『日本言語地図』では、オに対応する軟口蓋音 ([g] または [ŋ] [ɣ]) の交替例と見られる語形が点在する。

(32) ニオイ→ニゴイ ([niŋoi] [niyoi])

268図 〈芳香〉

静岡12地点、長野中～北部6地点、神奈川5地点、東京5地点、千葉
1地点、大阪北部1地点

269図 〈悪臭〉

静岡15地点、長野7地点、神奈川5地点、東京4地点、千葉1地点

(33) コオリ→コゴリ 261図

奈良県北部10地点、京都府南部3地点、滋賀県2地点、兵庫県北部1
地点

(32) の場合はオに対応する音が [g] (または [ɣ] [ŋ]) へ変化している。この交替例が比較的多く見られる長野県や静岡県は、いずれも語中のオが [wo] と

なるという報告がある。

(34) o 円唇の [o]。唇の突き出しは少ない。語頭以外で 'o に対してわたり音の半母音 [w] を伴った [wo ~ ʷo] が実現されることがしばしばある。

'i'o [iwo] 〈魚〉、ni'oi [ni^{にお}ʷoi] 〈匂い〉、kacu'o [kaatsū^{にお}ʷo] 〈鱧〉、
sa'o [sa^{にお}ʷo] 〈さお〉 (中條 (1983 : 147))

(35) 長野県木曾開田村 [wonnna] (女)、[wodʲi] (俺)、[sawo] (竿)、[iwo] (魚)

長野県北部、木曾新開村、三岳村など (開田村を除く)

(『日本方言大辞典』「音韻総覧」)

実際、268・269図では、静岡県・長野県のニオイ系統の語が [niwoi] であることが多い。また、神奈川県にも [niwoi] [niwee] などの語形が一部に見られ、この場合も本来オは [wo] であったと思われる。

(33) の場合も、現代近畿方言では [o] に統一されているが、キリシタン資料や悉曇学書等の過去の中央語文献から、本来 [wo] という音であったことが指摘されている。これらの例も、[w] と [g] (または [ɣ] [ŋ]) の対応とみてよいであろう。^(注20)

上に挙げた例に見られる軟口蓋音への変化は、同一環境にあれば必ず起こる変化というものではなく、ほぼ語彙レベルにおける変化であると思われる。しかし、語彙的にしろ、[w] から [g] (または [ɣ] [ŋ]) への変化は日本語において起こり得ない変化ではないことがわかる。

こういった交替の要因は何であろうか。一つには聞こえの類似ということも考えられよう。しかしそれだけでなく、この変化は調音点の変化による音声の変化としてもあり得るように思われる。この [w] の音声変化について、服部 (1984) は次のように述べている。

(36) [w] には軟口蓋化のあるのが普通であるが、この軟口蓋化が強まると唇音化した [ɣ] のようになり、さらに [g] に変化し得る。(服部 (1984 : 111))

このことから、鹿児島方言の「～オル」のバリエーション「～ゴッ」は、「オ」が [wo] であるというところから、軟口蓋化が起こったために出来た形態なのではないかと思われる。

(37) [w] > *[ɣw] > [ɣ]

鹿児島方言では、現代においても老年層はガ行合拗音を保持している。この

ことも、唇音化した [y] の存在を許容したのではないだろうか。^(注21)

4. おわりに

本稿では、前半で近世期における鹿児島方言の「～オル」について、その意味を記述した。また後半では、現代鹿児島方言の「～オル」の語形のバリエーションについて述べた。結論としては次の通りである。

(38) a 近世期における鹿児島方言の「～オル」は現代につながる進行態及び過去の習慣の意味を持っていた。

b 現代鹿児島方言の「～ゴッ」の出自は「～オル」であり、語中のオの音 ([wo]) が要因となって変化したものである。

ただし、(38b) の変化は語彙的なレベルでの変化であろうと思われる。[w] > [g] の変化の例も少なく、不明な点も多々ある。ご教示いただければ幸いである。

(注1) 近畿地方を除く西日本諸方言を指す。

(注2) 『日本語会話入門』『友好会話手本集(草稿本)』は、九州大学図書館に所蔵の資料を利用した。この資料は、ロシア資料を広く世に紹介した村山七郎(当時九州大学文学部教授)がロシアの東洋学研究所から持ち帰った原本のコピーである。『世界図絵』は、江口(2009)に拠って用例を集め、鹿児島県立図書館のマイクロフィルムによって該当箇所を確認した。

(注3) 日本語訳については、江口(2009)を参考にして訳を行った。また、本資料に記載の日本語訳は、ゴンザがどの程度関わって成立したのかははっきりしない。現段階では、ゴンザはインフォーマントとして日本語訳に関わった可能性が高いと考えているが、本稿ではこの日本語訳を便宜上「ゴンザ訳」と呼んでおく。

(注4) 本稿では動作の時間表現について、「既然態」(「単純状態：顔が似ている など」「結果継続：葉が落ちている など」を含む)、「進行態」(「動作継続：ご飯を食べている など」という分類を採用しておく。

(注5) なお、「作りとりおらん」に含まれる「～トル」は、現代鹿児島方言でも用いられる「完遂」を表す複合動詞後項である。

(注6) この点については後述する。

(注7) なお、この資料には「テオル」も3例見られる。動作の進行の例が2例と結果継続1例である。

(注8) ただし、「～オル」とは共起していないが、本文中に丁寧表現の「デス」「マス」が用いられており、改まった文体であるという可能性も拭いきれない。

(注9) 進行態の「～オル」と対立する既然態の「テオル」は、ロシア資料に393例見られる。「テオル」の意味については、拙稿(2012a)を参照されたい。

(注10) 今回の対象資料ではないが、『新スラヴ・日本語辞典』にも「～オル」の例がいくらか見られる。

(注11) 本稿で用いる方言のデータは、2011年から2012年にかけて集めたものである。調

査地点は鹿児島県鹿児島市及び同県南さつま市。質問票による面接調査及び談話収録を行った。ただし、今回の調査では鹿児島市のインフォーマントからは「～ゴツ」が得られなかったため、ほぼ南さつま市のインフォーマントの用例を用いている。(6a)は、南さつま市在住82歳の女性(外住歴1年半)による。(6b)は南さつま市在住77歳(調査時)女性のもの。外住歴は次の通り。0-16 鹿児島県南さつま市、17-20 佐賀、一旦鹿児島 20-22 大阪、23- 鹿児島県南さつま市。主としてこの2名のデータを用いる。なお、「～ゴツ」を進行態の意味よりもかなり過去の習慣の意味で用いている例が多いのは、談話(一人語りを含む)からのデータであるということに加え、「テオル」系統の形式「～チョッ」がかなり進行態の意味にまで食い込んで来つつあるためかと思われる。

(注12) 現代において、実際の発話では「～オル」は「～オッ」と語末が促音化して発音される。本来ならば「～オッ」と表記すべきであろうが、2節までの表記との整合性を保つため、以下も「～オル」と表記する。

(注13) なお、鹿児島方言の様態の「ゴト(ゴチャー)」は、他の九州方言と同様に格助詞「の」を介して名詞にも接続する。

(a) クマソンゴチャー(熊襲のようだ)

(注14) 「降る」という強変化動詞では「フッ」も「ファイ」も連用形として機能する。

(a) アメガ フツチョッ(雨が降っている)

(b) アメガ フツタ(雨が降った)

また、地域によっては「ファイ」が終止形として現れる場合もある。そのため、連用形相当か終止連体形相当であるのかがわかりにくいのが、(14)に挙げた「晴れる」のような弱変化動詞をみると、連用形と終止形の違いが明確に分かる。

なお、木部(1997)によれば「ファイオッ」と「フッオッ」は異なるものであるという。「ファイオッ」は「動詞「降る」の連用形+オル」であり、「フッオッ」は「動詞「降る」の連用形+テ+オル」であるという。九州方言学会(1991)には、進行態の例として「フッオッ」という形式が見られるが、これは「降る+テ+オル」ということになろう。従って、この「フッ」は「～オル」に接続可能な連用形ではない。なお、鹿児島方言の動詞の活用形については、後藤(1983)を参照されたい。

(注15) 津田(2010)による調査でも、「～ゴツ」を用いる地域は「～オル」を併用している地域が多い。この様相は、やはり音の変化によるものであるということを示しているのではないかと思われる。

(注16) ここで、少し文字遣いについて触れておきたい。ロシア資料には、発音の異なりではなく、同一音声の環境による文字上の書き分け、文字遣いが見られるのだが、このoとvoの書き分けは文字遣いではない。江口(2006)には、文字遣いの例として次のような例が指摘されている。

(a) イ音

a 母音文字の前 i

b 母音文字の後 ÿ


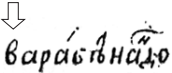
c それ以外 и

(b) ア行とガ行のエ段音

a 語頭 e

b 語中 ъ

これらの文字の使い分けは、ロシア語側の表記上の制限に大きく影響されたものであるという。上の例に見られるように、文字遣いは母音同士あるいは子音同士という単一の文字間にあるものであり、オの対立（o と во）は、母音対子音+母音の対立である。こういったタイプの文字遣いの例は見られない。この o と во の表記は、やはり文字遣いではなく、音声的な違いを表しているものと思われる。なお、江口（2006）によれば、『日本語会話入門』及び『露日語彙集』には、в に 2 種類の字体が存するという。次のような文字である。

(a)  (кава : 川)
 (b)  (варабънандо (варабънандо : 童など))

江口（2006）によれば、この 2 種の書き分けは文字遣いであるとされる。今回扱う o との関係において考えると、(a) (b) のいずれも子音+母音であり、o とは対立するものであると考える。また音声上の違いもなさそうであることから、本稿ではこれら 2 つをまとめて во と捉える。

また、「オ」を表すキリル文字にも、2 種類の字体（o と数例の ѿ）が認められる。

(a) ѿчерарь (落ちたる)
 (b) ѿцурь (落ちる)

ロシア語において o と ѿ は「発音が類似して」おり、「余計で不必要な文字であると考えられていた」という（山口（1991：152））。そのため ѿ の文字は、ピョートル大帝時代に廃止が決まり、ロシア資料成立前後はちょうどこの文字の混乱期であった（小林（2004））。上に挙げた例（o と ѿ）も表記のゆれであるように思われる。『世界図絵』は、ロシア語文、ゴンザ訳、そしてその傍らに、その文で用いられたロシア語単語を抜き出したものとその単語の日本語訳が記載される（単語部分）という体裁を持つ。(a) の例はゴンザ訳部分、(b) の例は単語部分にあたり、それぞれ同一の章に見える同一の日本語動詞を記したものである（ただし (a) は尊敬の助動詞「る・らる」が付接している）。したがって、この 2 つの文字に何らかの発音上の違いを見出すことはできず、両者は同一の音を表す異体字であると考え、まとめて o として扱う。

(注17) ただし、アスペクト的意味を担うと思われる「テオル」9例に限っては「чѡрь」と o 表記になっている。ロシア資料には、「テ+オル」というアスペクトを担うと考えられる形式が「テオル」「チオル」の 2 種見られる。現代鹿児島方言とほぼ同形の「チオル」については「чѡрь（チオル）」という融合した形になっているのであるが、「テオル」の方はオが語頭相当の表記 o になっている。「チオル」ではなく、「テオル」と割って発音したために、語頭と同じ o 表記になったものか。この点、もう少し考える余地があろう。「テオル」と「チオル」については拙稿（2012b）を参照されたい。

(注18) なお、内間（2004）では、この変化は 5 母音から 3 母音への狭母音化による強い呼気によって生じたものであると説明されている。

(注19) 『日本方言大辞典』の [g] 表記は [ɣ] を含んだものである。そのため、[g] であるのか [ɣ] であるのかはっきりしないが、九州方言のガ行音は概ね [ɣ] であることから、この例も軟口蓋摩擦音であると思われる。

(注20) 『日本言語地図』芳香を表すニオイの268図・悪臭を表すニオイの269図では特に解説では触れられていないものの、85図「ニオイを嗅ぐ」の言語地図では、

「ニゴイ」もニオイ系統の語と同じ配色の記号になっていることから、同系統のものとして捉えられると考えられる。なお、85図も、268図・269図とはほぼ同様の分布になっている。

(注21) [w] から [g] (または [ɣ] [ŋ]) への変化において、[w] の後続母音が [o] であることも関連するのかもしれない。なお [w] と [g] の対応は、日本語だけでなく印欧諸語にも見られるものである。この対応に関して印欧諸語の祖語と考えられる印欧基語では *g^w、*g^wh を想定して説明される。

*g ^w h	{	g	……………	リトアニア語・古アイルランド語
		g/w	……………	古期英語・古期高知ゲルマン語
		g/w/gw	…	ゴート語 (寺澤 (1997) より)

この変化において、ゴート語では、印欧基語の [*g^wh] が、u や o が後続母音となる場合には [g] に、その他の母音が後続する場合には [gw] あるいは [w] になるという (八亀 (1988))。両唇と軟口蓋を調音点に持つ音が音環境によって軟口蓋化する例と言えよう。

またアルメニア語では、印欧基語の [w] が [g] になるという対応を見せる (寺澤 (1997; 1652-1653))。

【参考文献】

- 内間直仁 (1984) 「宮古諸島の方言」『講座方言学10 沖縄・奄美地方の方言』国書刊行会
- 内間直仁 (2004) 「古代日本語のワ行子音の [b] 音化について」『国語学』55-2
- 奥里将建 (1938) 「元禄前後の鹿児島上流方言 大和口上物語集とその検討」『方言』8-2
- 生塩陸子 (1984) 「沖縄諸島 (属島) の方言」『講座方言学10 沖縄・奄美地方の方言』国書刊行会
- 上村孝二 (1968) 「南九州方言文法概説 — 助動詞・助詞 —」『薩摩路』12 (井上史雄他編 (1999) 『日本列島方言叢書27 九州方言考⑤ 鹿児島県』所収)
- 上村孝二 (1998) 『九州方言・南東方言の研究』秋山書店
- 木部暢子 (1997) 「I 総論」「II 県内各地の方言 穎娃町の方言」平山輝男編『日本のことばシリーズ 46 鹿児島県のことば』明治書院
- 九州方言学会編 (1991) 『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房
- 金水 敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- 工藤真由美 (2004) 「II 研究成果の概要 — アスペクト・テンス・ムードを中心に —」工藤真由美編『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系 — 標準語研究を超えて —』ひつじ書房
- 窪菌晴夫 (1999) 『現代言語学入門 2 日本語の音声』岩波書店
- 国際音声学会編 (2003) 『国際音声記号ガイドブック』大修館書店
- 国立国語研究所 (1974) 『日本語語地図 第6集』大蔵省印刷局
- 後藤和彦 (1983) 「鹿児島県の方言」『講座方言学 9 九州地方の方言』国書刊行会
- 後藤和彦 (1994) 『鹿児島方言の語法研究』
- 小林 潔 (2004) 『ロシアの文字の話』東洋書店
- 迫野虔徳 (1991) 「『新スラブ・日本語辞典』の「オ」の表記」大友信一編『辞書・外国資料による日本語研究』和泉書院
- 瀬戸口俊治 (1987) 『南九州方言の研究』和泉書院
- 津田智史 (2010) 「南九州地方のカタとゴッ」『言語科学論集』14

- 寺澤芳雄 (1997) 『英語語源辞典』 研究社
- 輝 博元 (1984) 「喜界島・坂嶺方言の音韻」『講座方言学10 沖縄・奄美地方の方言』 国書刊行会
- 中條 修 (1983) 「静岡県の方言」『講座方言学6 中部地方の方言』 国書刊行会
- 中村萬里 (2004) 「江戸幕末期の薩摩アクセント——安政3年生まれ岩山トク氏の談話録音テープをもとに——」筑紫女学園大学紀要第16号
- 中本 謙 (2011) 「P音再考——琉球方言ハ行子音P音の素性^{すじょう}——」『日本語の研究』7-4
- 八亀五三男 (1988) 「印欧語の labiovelar (唇軟口蓋音)」『防衛大学校紀要』56
- 久保蘭 愛 (2012a) 「ロシア資料にみる18世紀前半鹿児島方言の「テアル」「テオル」」『日本語の研究』8-1
- 久保蘭 愛 (2012b) 「ロシア資料にみえる「テオル」「 Chol」「トル」」『平成24年度 西日本国語国文学会会報』

※本稿を執筆するにあたり、かりまたしげひさ氏（琉球大学）、川瀬 卓氏（弘前大学）に、有益なご助言、ご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。

（くぼぞの あい・本学大学院博士後期課程）